3011
1

へ13
3011
特1-14
3011
1
昭和九年七月一二日
購求

伊呂波文庫序

金樓子曰。有人讀書把卷即睡因呼書
卷爲黄妳怡神養性如乳媼也。古者
書以濃墨添乳〻云。志〻ゝ墨ごと睡をし
いめ書に二品ゝ。京睡人ふ二ゝ情あら
ん歟。特て書中の美文佳境を敬忍ん

神仏遊しの後千秋悠々と睡らべ。スヤ乳
の功を為べし。予が著せる草紙のかきハ其達磨
ある人ハ揮毫なれば書人達磨ハ。
是を出もきねし字ハ。ぶりく怒泣ぶら麻乃
類せんの今さらの英名ハ所の子昌波文庫ハ。
さらに功拙の論ハ待ぶ。世ハ忘まく思

泣ぶ拙く傳ふしべ。ぶまぶ風やいろ
はハ我質へ。児女童幼ハ世ハ川ハ元
俄然睡ハ醒ん思ふく

千時天保申年春

義名再三拜くの日

江戸

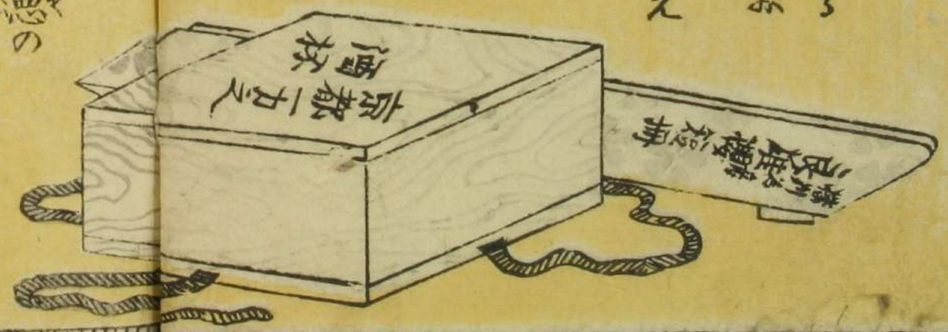
為永春水老人誌

引用書目

赤城盟傳
仇石記
播磨杉原
本朝忠臣傳
赤穂鏡記
赤城武鑑
赤穂記
大石物語
赤城盟記
赤穂銘々傳
忠誠後鑑録
内侍所
遺老物語
鸞之毛衣
異本義士傳
元正間記
活真砂子六十帖

伏稟

假名手本忠臣藏の淨瑠璃は天下に美稱せらるゝ三才の童子も見聞を知る故小説浄瑠璃をいふ人もわるべし甚流行おびただしきて義士の傳を戯作せる音曲演戯画本草双紙はいふまで浄瑠璃向をかえ其奇を著して彼が義勇の誠忠を演る数百種和漢ふたつに類なきこの義志を称するのゆゑ星霜移りまゝ世ふ廃せざる然るに戯墨の奇を愛して実傳を沿て傳ふも少なからず仍て巻端に義士の像を摸写して傳記四十有余人の畧傳を春水翁正史によりて是を誌せり粉骨砕身の辛苦をいとゝ姿ばかり



名を変て終に本望を遂し光景を寫せば
その事実ハ世に負婦列女のこと我も
世せり其悪臆病をいましめ勸善懲悪の
一端なるべきゆゑ編を嗣全篇ハ充ぶのこゝろ
めやすしこのゆゑ編を嗣全篇ハ充ぶのこゝろ
義士の畧傳全く備ふ本文ハ児女の見やすくしんが
為ハ流俗の人情本に倣て善悪應報の理を誌せり
狂訓亭主人一家の口調をもつてみだ傳ざるゝ
世にもつふてるゆゑ浄説と一列よまふ
めふてるかゝ義士の異説珍説耳ざるといと多し
古き説温故て新らしく実傳をあらものがるをきり
数編畢兒ゑ住境よいあらん異くハ宜しく
高評をゆとあり云

版元　三林堂　欽白

義士繡像四拾余人　朝倉伊八刀

鹽谷判官高貞

温厚謹素の生質
ゆゑに臣を愛し憐
むこと子の如し臣も
また君を思ふこと
児の親を慕ふが
如し千金の
駑馬を買ふ
為に枝を不惜と
いへども失國失命
臨節では風竜の
猛虎に向ふごとし
堪忍に不及宮中紛闘の罪
法令は反難し可惜文武
兼備の將

高野師直

欲は仁に勝
義は勝禮に勝
智は勝所以貪欲
姦悪の
志威に
誇ること
君を蔑ろ
卑劣と行ふ
身と怨汚名を残し
家を滅ぼ
流布傳演
斯のごとし可謂奉録の賊士
人面獣心

大星由良之助
良雄

忠ハ范蠡袁盎ニ不及
勇ハ伍子胥雲長ニ比せり
智ハ張良孔明ニ恥ず
亡君の為ニ狗死ス決
士三百余人
盟約ニ背き残者
五十人病ニ死し
義ニ死せる士
三人四十余人
良雄ガ指規ニ従
忌日に當つて敵
師直の首を取
其位ニ備志を遂

愿内反間奴女ニ
弱ハ放蕩よろこく
妻と離別し親族
義を絶ち後難を
除く遠き慮つまわし侯漢
いまこそ聞き斯のごとき忠
義勇の一豪傑わしと
累代ニ美名を輝して忠臣の鑑と
書り

水ふかう流るる
なかれ
藤くもるとも
濁るなかれ
世の人の
笑ふ
栖ぐ枝

大星良雄

常聞今世有忠臣
報國復讐寧顧身
效死唯知同取義
正喜共成名豈須狗吠
三千客却勝薤歌五百人
伏劍一朝泉下去英雄
誰不淚沾巾

巻中漢舟
緒像
英泉画

良金ハ父良雄ハ従ひ鎌倉ハ下ル
志と金鉄ハひとしく為て終ハ復讐乃
素懐とさぐ為時生年十六才
智勇衆人ハもぐれ
美貌の聞え高し
同盟教ニ兼と
小野九太夫
親子が
貪乱ニ悪と
こと比て潔ク不忠
不義と正ちくも天あの
美少年二人ク手を以ク
もるのめ
ちゃん欽

大星力弥良金

塩谷の忠臣等城小篭を
殉死せんとせ君恩を伏して
命を惜んぞるハ君々ろぶ故に
臣もまこと如斯臣ろ
義士のこと
本文に
委し
向島八十右ヱ門常樹
原郷右ヱ門
元辰
長谷孫九郎
正辰
原元辰
浦松半太夫
高直

潮田吸之亟
守教

早野勘平義利
忠死同盟の約束を
あらんと父母ハ農家
ハあつて高ひの損益
の外武備の義
論ずるを主とせ
浪人せし武士より
とび伊丹ハ安住
させんとて郷士某に
聟養子の約諾をなし
義利實をあらず父母を
諫めて忠孝ふたろ

ふたつ全うしんと欲
欲せど父義理ハ迫り
郷士へあらざるに
密夜を告げるあ
義利せひなく
大星へ書置
あて郷士をさし
殺し自滅しく
殉死せり良雄山科に
ありてこを聞き感歎
あて艱難とぞ

武士のこころ
たゞこのこと
一筋よりなりたるけり
死出の旅路哉

早野勘平義利

歴史通賢傳 いろは文庫巻之一

東都 狂訓亭主人著編

第一回

小山田左左エ門 兵衛 直助 権兵衛 の傳

読賢高人の高人の

一 敵討の次第を出発よりくゝ古今稀なる敵討の次第を出発よりくゝ古今稀なる敵討の次第を出発よりくゝ古今稀なる

と
惜めける。忠臣義士も幸不幸。通夜人よ岩らドと。[illegible]
金鍔の。血も落ける色。狂の。たらぞ出ると。ありけり。[illegible]
山田庄左エ門の父重兵衛と。笑えしへ。張よ。聽めも。傾きて。八十
一才の老衰と。ありけるのこと。病氣も。速判。[illegible]
[illegible]の。[illegible]の魂。[illegible]庄左エ門のけみげるも。[illegible]勇
到の。[illegible]なるまも。會盟の。中と。[illegible]勇まーく。[illegible]の病氣も
うち[illegible]。[illegible]藤村の[illegible]義士の姓名記しう。[illegible]
[illegible]賣[illegible]。[illegible]始終[illegible]演下せと。[illegible]

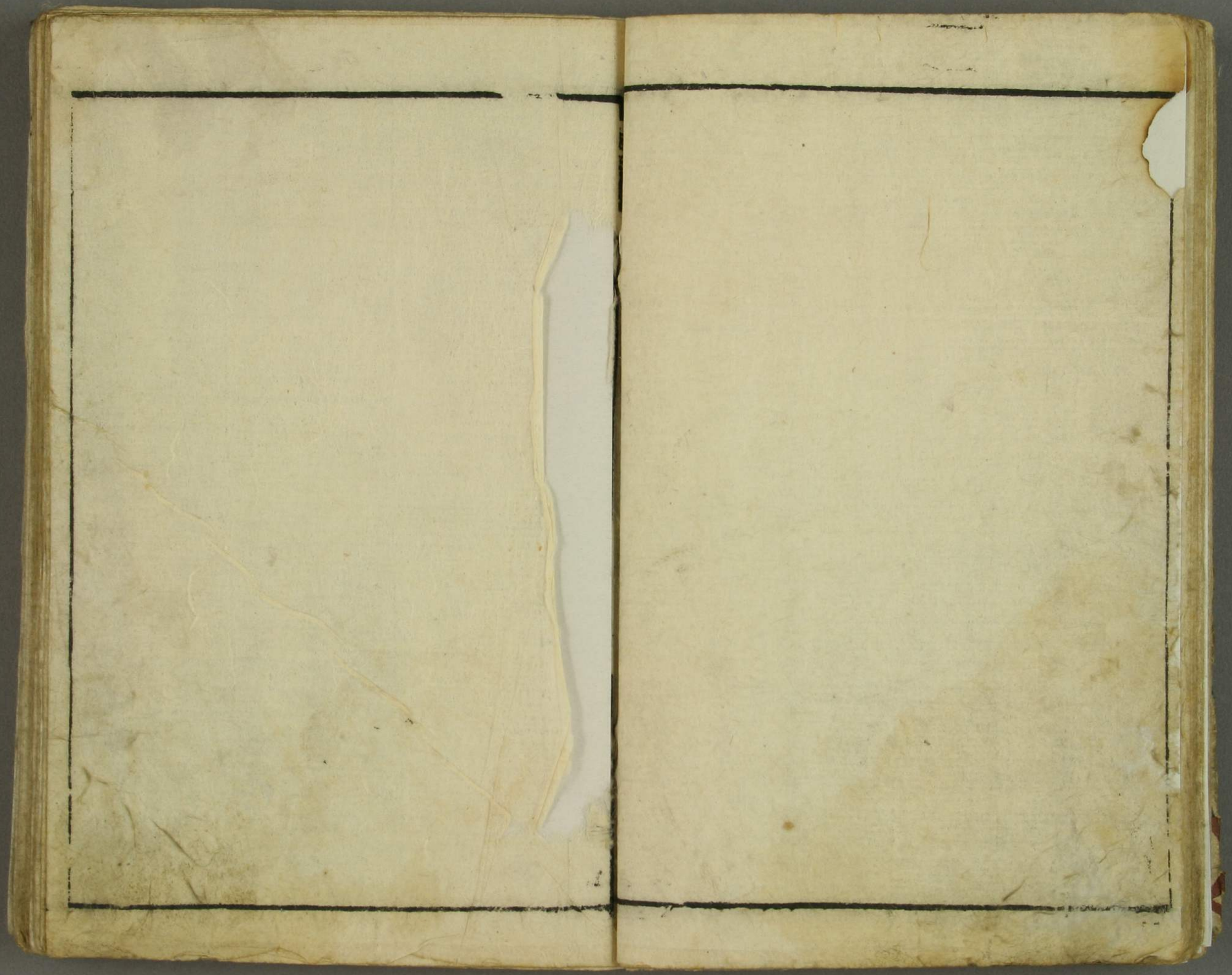
の[illegible]。[illegible]不思議と。[illegible]。[illegible]
[illegible]。[illegible]。大皇氏も。一方の。[illegible]
庄左エ門。[illegible]。[illegible]不淫字。と。[illegible]
[illegible]細。將の名目。[illegible]。[illegible]
[illegible]。はぶ。[illegible]。門の戸。押。[illegible]。入[illegible]。[illegible]
も。[illegible]。六十の。[illegible]。[illegible]。[illegible]
[illegible]。[illegible]。[illegible]。[illegible]。[illegible]。[illegible]
[illegible]。[illegible]。[illegible]。[illegible]。[illegible]。[illegible]

ちゃひきーと「ヲヽ小吾郎さんか」とおっしゃれる。今と昔とは違ひで
買ひもーこと。紛らはしいやうよろこまんテ「ヲヽ」
どうもまあ。紙らのそも一昨日イヤ第一昨日のことぢゃ。今日貴さ
まらのじゃうぢものを遣つてくださりでどうもまあ。そもそも紙が
まごこんをまねげ。解小三郎ゲあ人まるあ蔵ゆう写して来ること
この書翰。あっも二軒のおん名で。お書翰ふちゃるこの紙うつして
持ちく来ーとつの紙やすり重ね。あ子の名あわるざと
ゆよかいう連名ゆう紙之眼之多紙さーゆ「イヤ」そもそも

かくてけあいドレ引合ーてこそ人殺ゆ人
器ーしく紀せー偽紙ゆ。後ど小山田とも。庄左衛つとの紀し
てこの見べの。赤眼の看板ーと。眼鏡の器ゆ紙ふく種も
後の者ゆ。あ紙麗む。文字ゆ。ふけつ。小吉郎も
徒紙ゆ書せく「モシ重吉さん。拳人の書翰を見ゆ」
拝べ。ゆ。見さんの本名ゆ。まご拝りくこゆ。一昨日ゆ
ゆ紙対の。ゆと。ものよ。見べ。ゆ子見さゆ。同ゆこの名義と
おゆーるさてこ大事の本紙。紙ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。

幸人のようすを。さぞうーと賞めいうさせべ。ひろ和の仕組細さくも。
蒙ーヤーて稼くお呼るいてまもぐ。い連名のかなどぐひ子息さ名の
お名でどざりまもる。和てのもとふ仕実名紙 さ見べヤ私も
コレ見がと。おそるーヤもぐ楽しまる。業家とうく探かくーく。見
まどもえんね家子の姓名 小へ十くく。きまくえどどざりまんまいかと
紀ーてどざるゆう。為且形のかな魚 主へ芋 実名へ小山田庄たろう
小へエイアノ 小山田庄たらどのえ 主へ作山るひめいろ。桝の名あげ
何というーまーと。見るへ編てきるけまど。為討死の沙汰でもどざりま

もうる 小へイヤ 左様でいどざりませねば 主へイヤく どゝ久紀める
ひ様子。りや桝のその姓氏。おそるさまもどざーべ。為然
とのりまコレ以親又人 小へイエ 何も為さとと実へ為ませねゲト
りへ桝見まる為氏。そうくあのくく 鈴木人間人 鈴木へ為清
親まの こうーの。仕へ主ーこうー 仲間五助 主へ且船 為今日へ霧
見へどどどどざりまもる 主へそ五助う家への小さく 鈴う出ける
為ーー家さどどろの鈴ま濃世も出家まへイヤそまへそうこと
家の一件。世間の噂氏ゲやっこうトのべ五助へ生ぬがたろね



曾鉄の正重のの。茶後ちゃうのめしびとも　五へ　五十　脇さ夏の俤を
打ッ右ちゃうとく。四十七人　史　勢揃ひして。高の師直の屋しき夜
討おそ猶の。嘗のやうなめでたどぎりませぬ。丁度私ら合ち
基ますで手紙使ふたのまとく。帰りく来ちとむちう。歌の首
と取回んで。引ゆげてどざる雲きまっさ。日な嫁で笑及ぶね右法
しや義士しや英雄しやと　往来もとまるくらひいやモウたそう
お評判でどざりまた　一　そまたうア　そ八沙同つく家
中の元と。一くうんさたた幸ひあるましや俤の法まもりさ

今ふ小ちうね將の様ふ。ぎの様ふ。ぎの様ふ。ぎの

[illegible]
やうしの目形。コレ式どうしてもこの家来五郎の目
形のやうに乳へおしても枝ゥ。八十歳位紙さまて老人さぞ難儀
てござらう。ちゃうしやうのお人ぢやうう。今度紙でもあるかねを紙
[illegible]
たらうと笑ひ〳〵さまべ。十二日の日に連中へ割付る上百枚
[illegible]
圓覚寺へ納る亡者の巾送物。その二品を清ちゃく。
[illegible]
[illegible]
[illegible]

と論方るーの捨くこゝろふ。そこ
島式。はくぐくそひめぐらもよ。彦子の書仏おを遣むるまゝ。さも
あれこゝろのこゝろ方ほ方で。書数らまー連名へ。一字もこゞ紙四十
七枚。小山田も表たこゝろ。もこゝで天紙よ仏の紙をてよう仏
奉せーまうこゞひあー。さも和ゝもーて絶対の。呼紙笑より自勝
しく。彦こゝろめこせー彦子の名氏。いようひもこゝ和ゝさ。今を
も和まゝ表の対も。在命ちられ面目紙。彩ゑまへちこけめこゝ
ふとこゝひ落こる重苦勝が。仏のそこゞ奉とこり。五助へこゝね

男ゆ表いこゝるいくこゝ紙こる。勝こゝへ例の小間物屋彩ゆ表
ほーしこゝ人この時ゆ表ーー紙対。こゝぐくこゝ中こゝ笑こる
小山田のこゝふー紙こゝくこゝ。こゝゆ表。こゝゞ勝の壁の方紙。こゝ
時ーゆ壁紙こ。ぐゞこと貫くこゝ白及の切先。こゝこゝこと大勢こゝゞ
おどこゝく中こゝこゝの彩の小こゝ勝。言こゝ勝かこゝ表こゝくこゝこゝ
そゆ和ごこゞ。紙言こゝ勝ゝこゝ彩のこゝこ。腹切こけて切こゞーゆ
ぐ。こゝこゝく間式貫こゞ。その切先が小こゝ勝のこゝ家ゆけこゝ
こゝくこゝけこゝこゝ。小こゝ勝ゝこゝ入こゝこゝこゞ。こゝこゞ仏様むこ

[illegible]
[illegible]
[illegible]

近藤清方様

かる一言成共あり。小藤をたゝ近所の人こそ。その如根
を不復よ呂ひ。まこと家たゝがゝ不思議成かゝりけ之。少、
みゝく此事を公儀へ訴へなまつまく。そもく〻の四さ一ばよ成
うせ。故今ばよ呂ひるとぞ
かる左衛のゝと生ま一。兵たゝがゝ家ひゝ。ゝゝ

そのことゝ決の御下と清ひそ之ゝ

第二回

再説小山田兵たゝへ。大星の下ゝよ隨ひ。四菩提所圓光ち小
いとり。そもとより同意の浪士人金子を所蔵一買物借財の排ひ又
妻子等の扶助よ申させんと。三百両を渡さゝ。これを懐中ゝて大師
基町といふ所を徒かゝ行ゝ。雪ゝ氏程を嵩寒の折よ者ゝくと
冷とゝる。こまさ綾ぎの酒徳縮。扶とゝて身ハ死のと思ひ者
骨を後の眼ゝも世の中の。兵ハ曲者兵衛ゝよ。歳ゝる時屋

さる人十七八の若田髪。染もうつくしる恵女の如くなれたるハさま
ゆと後ろ。よくく着まべ五一須。ろくも紙生の上自婦人ゆりて妻ま
せんと。脱ま袖ひ。きくく。書農稽むその中ま四の大妻ちり
おくまと。ゆりその後ハ書面活ま。絵くる縁の紙如ま。他くくハ
ゆろゆ一ままくと。黒紙ま丸ゆて美人接。振ゆ人ゆ丸ま娘の奥
ま兼て如屋と紙ま。人ま変ぬ面ぐ一まて。ま二段の美
ま藤ゆ。女ま風と眼紙ま人合せ。ぐろ一そうま奥ゆむけ。小
つま稽くるゆ中くゆ。教ゆくゆ黒紙白紙。ま書ゆ陽巻

の紙編。ゆ。ゆ風の中ゆと書ま弱中ゆ。他の
ま一ま紙ま。ゆ。ゆ風黒ま。紙ま一ま。ゆ。
と。二十ゆ。ゆ一ゆ。ゆ町屋の中ゆと。ま流一ゆ
ゆゆ。ゆ。ゆ。

まづ表一丁位居るゝ。娘のこての格子戸。ぬて家内へ入るゝ
けゝ。惑ひ帰りて座たらへ。手に持てものをきて。おとく
然とゝくイバ形も二階より糸竹の音ゝ合奏ゝ妻
琴ゝ調ゝよく。ゝゝの間より覗のあくゝまゝゝ女のおとゝ。物く
とゝて突ゝまゝ。知れぬく座たらへ。脇より猪ゝる男素ごとゝて世
の中といふものゝ。同じ世界ゝ人で。帰宅ゝ
ゝの琴ゝ味線。なりゝそゝゝ拵ゝ。男人拵ゝ見物
ゝまゝ引ゝ。時日経ゝ。いゝ事者。大頭成紙といふ

目次ゝ。ゝ紙切ゝ。時日経日ゝ。命
ゝ。ゝ一生も。別ゝ
口格子戸。ゝて。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ門
白くゝて。容ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ
ゝたらと。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ
たゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ

ちろう主出る。この家のあるじも塩谷の浪人。以前の殺人犯人の金
や。彼らとて。ひとりの多数幸ひよ。紛らしくる多人分の金子を
と元手を拵へ。女を抱へて料理屋の取扱女工通ハしを
あるなるべ。手を長代を長を業とあり。まこと内く金を貸して利分を貪りし
今ハ豊さんらしく。実名を西矢たつと。西村屋ハと仮名し
て。その所ハ隠居しあり。業ハいさとまやめづらしい表ちどの
表ちのごコサ。ア。山方へ。表ちと且ちく玉垂氏一刀い業まぶ四畳
猪で。かハしアかちんくしい浪人。業ハ山方へ内ん女人

ハテサ。あぜそん。あるよ。まこと。居まるぞ。ちらん。あ。ちらが。浪人。ちらが。宅
じゃ。サアく。ぬぐ。草鞋。脚。脚半。脚絆。ちゃも。花御とい
ふ。形ぐのトひひるぐら。奥の方へ。変をかける。業ハ。ちく。またらい
胴蟲の。湯気。ちく。表ハ。いさ。ハエく。表ハいさ。ハ。屋。表
せん。今見ハイト。表ハ。ハ。ちく。ハ。ハ。ハ

親子
志あるべし
列忠乃
亡ぶるの
擬惑ひ

く来る人で此方へ来るせんとて手拭よ見て洗わせる。所へ番
和し娘の手拭をもち来り（カノ）こまこそ有る所きこい手ードレ
彩が ふひてめげませう 女（イエ）くどういてもかゆない（私風病
でのあくこのく陽つくもどちがたりまものくト 寝床ふふ此
ふ死 床たこの腎ドもく 女度死死者 か（そまこぢゃ死さん
おぼびるさいョ。ちうと湯へ往くまつうう 女（ヘイ）くいめうり
とトいふこのうまとこの 業（サアヨ）ごまこぞ火を沸ふ居て来る
さ死へいる
そーうく鹿よ 物式うけて 揭燒 手てもちうくるサカく火鉢の

陽。ときこの者ちうまこの者いいく 弟とうくさく久しくあいる
んどう。時よ 蓋重る 形で 如へ 出けるつりぐ 女（ヘイ）ト 来る
方へうんどこちなくトいう 亟へ 瀬番出る 女（こまこくぞんト
がげるいは拍子を 縁よこまこで 業（アアこまこ 踊こ 踊こるくく 来
拍子で。めぐくでもかこる世人トこれ 見より 盃の 表おくさこう 二人
とも 縁 拍子よちうて 業（まこく お茶やくくト 大阪おの 業（
ヤイ こまこく 床さんよ 酌をもめげる 女（ハイ 今お 飯 物式 ちうく
まこのこまこ そうくト 踊こ 約 業（ぞうぐ 物の 女 女 女 こうも

やうこうれいハれ人か。きんざ〳〵る山ぶしでも移へぜ　兵「エヘ〳〵　浪人
あちやア。そん張る元気いどぎらいません　業「浪人ぐら〳〵まめるのア
きのぶ〳〵　そ大ふさ人推すやア来る　ぎき　さうぶん　ぶ業ぜ　兵「そ是ハ和そも
なまぐ　不及　移人ゐぶ。ぶ年人の身のうへハ実る義しいなぐる。不敵な
ぐ〳〵　どまぶ　田舎者　山移る　移毋　ぶ業　ぶ業　ぶ業　人も働きの
ぶると移人でぶ。大そうる遠ひぶれ人ぶ。どうすれば移る流ぶて
ぶ〳〵ろく〳〵居らまるる　業「コウく〳〵そ是ぶせまひろ間といふ
ぶぶ。懐谷の郡中で居るとこ。首や居ぶ法人るけれど浪
人ぶりやア天井板。移毋人ぶ。ぶ〳〵ぶ移人ぶ。ぶ〳〵ぶ
ぶろ〳〵て看る世人。ぶ金ぶ子ぶを居るるト。ぶ中の中ぶ居ぶ
ぶも。ぶ移ぶ移ぶ。ぶ〳〵ぶ。さぶろ押ぶ川。ぶ順ぶる時ぶ
ぶ居ぶ。ぶ居ぶ。ぶ面ぶ判同判ぶ。ぶ〳〵ぶ
ぶ人ぶ形容ぶ正ぶ〳〵ぶて　兵「イヤ表ぶの中ぶ毛ぶぶの仕合
ぶれい業ぶ移ぶ〳〵ぶ。ぶ〳〵ぶて　業「とれぶく居ぶ。ぶ人ぶの月ぶ
ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ移ぶるぶぶトぶぶ
ぶの移ぶ。ぶ　業「ぶりやぶけ。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ

この志四郎兵衛武義。腰に差つけてもよし。くく
れ人ゝ　イヤアいつの昔の大名なりまする。もうし人
平間村まで　家コウ〳〵その用向は大事の御ぶ。腰に
うの間ぶぜ　エ　何ダエ　家コレ　るくいと様人が。家の用と
いつの一味のもの　エ　家ぞつぐ〳〵もうし。成程そりやア
主従の中おもア　武義といつのもの。君の仇と思ふ
とちがつくかたの何ゆを考へて。こゝよく考へてみる。亡君の
高の民を切く捨てと思ひこまるとの。天下の義を捨ての名義

使よ義とうけさせて。捨威をうつゝ所真武。うるいと
せらく拾あつゝ。命をも命をもおれて。残金ぶく
城義の志。手損ドても自ゝ。高のもちどろ不貴尾の
ゆるこそ亡君の中ゝと十ゝ。法をもちく浪人の流
うちあんぞと従貴武信。一味をかゝひおも仕様が上への
あること亡君人。かつ人ゝ。ゝ自ゝ村帯をまつく
何事浪人の浪業ゝ。利分をかんゞ金銀をたく人を武
執捨の方ゝまづひして。亡君の仇金事さを。再度お名

世ーよ家柱よ。那よが五代の祖、世武
もかくりよんぞ。おさらぶ。ちくーとるーべ。亡霊のゆめとふ。もく
のこり。世武家は一門へまで。ちるとぶ。光祖人も不
ちりとあるぞ。皆一公へたぞうまうく。一味。経堂のゆめの。子孫
うまで。かる道理ぞ。御安ーと解らけーと。元来公の
紀まと。小口。後安。好智の弘多猪まを。ちらーく。まるーて
糸。霊武かさる。時ーも。ちや入相の鐘の。陰ーとと
潜れける。かる所へかのお安い。一隙見ーく紀報とるー。

たるが側よ。座、武の石の鬼
ふけ。酒よ。ちうとそうよ。ひそいふくうと。居ちりける。鬼等
かるーいうあや。世の人情。暫時の奥ーよ魂を奪うとて。稼ぐ
る。武百年の。流よ流ーそちらは。元との。見ひい。ぶーぞ。
ぞ。安が色香よ。ちうとさ。壮年の中よ。思ふ。いまご。定
まーべ。墨といまーあるよ。好色ーまりと。故人の金を。勇れうあ

正史
実伝 いろは文庫巻之一終

婦人孝經 江戸花誌 東里山人作 前後八冊

永縁奇遇者の花 菅垣琴彦作 初編三冊

所縁乃藤波 十返舎一九作 前後六冊

北三夜日待物語 岡三島作 前後六冊

正史実傳 いろは文庫巻之二

江戸

狂訓亭主人著編

第三回

「然て昔の為なれば、あるとあらでは、
まことにげんり、稚子の蒲焼も、
稚寵ものとて、昔男の、
後の夢もさえ、
最後をとうとう、酒のとがと

て藤のうへ馬場よりまてとうの家の女房衆とて
賊衆もうれうしくしれ事情の様子ろうあひ様げん
冬へ長さんもうかゑら　長へハイ　上ぎ寄いてはなし様の
今俗のいりくと。思ためとうもうく　冬へアレサ　長さんもう
もうれうよ賢ろ馬しいるまいつまてし。乳様よりるもくる
とらひるぐろ寄ふ粉を吸ものぜ　冬へお君と　冬へ
へイ　とまハトいてきて参るぐろ。ぎろくお冬の様をうろ
さう　酒の根多ありて長ろあ。服のふち様きようんのうと

まをかまりおーー屋ぎまあ屋まのある白縮緬のゆりど
あるうて瓜紅式さーと細れ様まて琴柱筆の紋の布
をちまい上羽陽ろ式かく風情。長左ろハ腰とちうて
緞鳥式ぢく形筆。側のお安い上喜猫が豊ろ式ろ
ら。耳毛梅へうきび式ふをうけと。楽焼の鼻子様を様
ぎろう　安へ長さん　お茶をおあぐんふさいまートいひろうぎと
おろよ　ぢろひ　安へおかろさん　ま長紋ぐまーと　冬へまや長様
ろ。ぎまぢもア　紋ハまウ　寝ろ　お安さん　ぎまんれの毒ぐぐ

山刀へ寝ぐらんとて枕してあげくさて
ろ
辺てあるべきうち。一人寝ぐらしてその
夜もたくさんいろ。ぐらんの根へ寝ぐ
お安も出郷よ。ぐらんの富業ありけん。
らね稲糸の。梶をるお安ぐらもちよ。
頼よ。紅葉の黒ゆうぐく。ぐらたちの
ちちとど脱ドキ。酒色の二ッ一ッ
ざ
雑紙ぐらも冬[ロ]もう直ぐ[ロ]ヨ。ドレ下へ縋てあく寝ぐ

1

宮糸ぐらもう。脱ぐをを下ッ足ぐ。ぐらの。ぐらさ
お安ハ客の側ぐらり　安ぐらん
あげませうト客の様ぐらう多紙さ下の足。さすりよかれべ
ぐらたちの、その手をあつかり引ぐて　ぐ[コウ]お安さん
狐ぢやア。ぐらん。あんまり嬉ぐくけて気味のよりんうめど
安「あぜんぐ。ぐざいまもん　ぐ[ロ]ちぜとぐらんおまえの様ぐ紙
嬉よ側へ移して寝ぐらるとのぐらもう不断ぐ安ぐ
ぐざいませうゲ。何うの寝ぐそくおとでもぐざいませう。ぐらん

お通入あさっさ付うゝ。からこーしゃうよぞんトゝ所で。見れも
おかゝさんも辞を。あゝ。ぞんうゝ。庭さんよお願ひヤて。お手紙
よおまたいく。お紙をゝと。座敷へ。ゆく。お客の様子をとる
気ぐもあくゝってゝらゝ。どめで。庭番らーんゝ。源氏を
ーゝらも。庭紙あゝーゝを。あゝ。ゝくもわゝまんゝゝゝとぞんくの
修行門。そもも。へ。紙のことおゝゝひヤ。見よありまゝ。ぞう
ぞ。お様。庭。でも。どめて今晩一夜ゝ抱ものーーゝうゝぞゝ
まゝ。おまゝゝさん。ゝ酒。でおゝゝゝゝゝぞゝまゝせんゝゝゝ。ゝ。お酒の

原紙。ゝぞゝうよゝゝゝゝゝ

叢艶
雪と欺く
模様より死
生ずえろる

ぜやうまるらうと。使ひまもりまつりこの点。紀亜の乃ふもと
ぞんじて。さく茶て居まものでございまもョ　元へ　ゆきく
きうりかまひそふよ。それでハさての宅よ今でも残て亜のう
安へハイ　十二　お指ごけまど。縁よかまとゞりてくまもんへト
さあしの中よ赤んくと。うえき　肌をさもごとく。安へ思
りぼ角紙ふるんし　安へそ　宅くなりくきさトをわぶり
大鉢をりよせる　元へ　ろんよ身に巻る程さもりくなりく
来るゆうど。おいくん酒の陽勢で温ぐど。おまくんさぞ

元へ　宅ろうる私が強の方へ行ぎうう。否でも宅さ強ぐど
さくへ遠へくく寝るはくる　安へハイ　ぞうぞうそまでれ　どうも
あれのまあでございまも　元へ　ゆきこそ　おまれの毒ぐ風で
も動ちせることか全さんの前くるる式滝　移人サりくト　も式
ときまど。お安へ酒寝と気ゆも　仏ぐ。まぐ　肌ちく式男の側
ちぐうしそうよのどくと。慌物よ元へく変らしく元
たうへ　紙もうまま。終よ今後の　　滝を
こそまげうよど。さて　四日へ酒の粋　さあての後へ人公會

ぬい　ぶんこう
盟同列の義士のおもひく。病よ彼居る父の業。
ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ
宿くもとぐろーく。脱よ者を改めんとまちよ。お安い兎の業
ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ
側紙をみれば。矢右衛門吏輔もとめく。頭ときと紙きくれ
ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ
しゆ。彼二百五の金いあり。勇をおさめるよ かとぐーぎと
ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ
不義の辯まぞいつまきうける。同ド多屋を脱わそべと。
ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ
義を猶よ情も薄く。実と採の松の死。てよ表れと笑
ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ
えーい。扨ようト浪士の岡田氏。その業終よ十六業ふく
ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ
塩谷家紙浪くあー。いまぶ。城下よりけるゆ父の金ちう

い鹿死ーく。遠ー列紙ちを三十年。大星のまとめれく。孤
ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ
獨をもぐむ義仁を義ー。いよく拾ろ者と者。さ、遊興
ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ
先きまく。元ちうまく下ろく。歌高堂の屋敷の業内
ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ
ムーくーく知らぶきを屋よ。屋敷の業よ住居をきりけ。太
ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ
物荒物乾物ろど。法ろ紙大略頼へて。世よ頭法ろる
ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ
業見世。五人こ春屋屋ぶ。門毛姿の高人。お安
ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ
移谷ぶ。亟。代八金馬。三年屋。岡野三十年。敷
ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ
ちいと。いづまも出義の屋ぶ。多紙改形谷を改屋。武

とかくこゝろ[illegible]まひ。別して国郡八幡一宮の
中ゝ。中一番の美男ゆへ。ものぐるゝ色殺めりく。貴
物よ持る人ども。こゝを愛して人ゝ。元来高貴の家
中とつゝ。仕入虚隆の元よりかまへ。老入る公の美妻
中間小者へ目をうけて。使よ持ゝ。酒
代を出ゝ。その如式よ給ゝ。せしゝ。ゆゝ重役のゆへ
深くもあしまれど。程なのの大器如ゝ。ゝ
何とも所垂の用意ゆへ。うんと。持く多入をゝ

用お家しゝ家中の出入ゝ。高人と
つゝ中容易入ゝ。殊よ尾林貞八の出入切手式
ゆゝ。何ひごとけれバ。義ゝ式ゝ。ゝ
実よ大星が推量のおゝく。歌の用ゝ。ゝ
ゝくゆやまちゝるゝと五よ如紙ゝ。けるが。彼二十年八
いたの間よ。ゝらひ。高野の部屋堀井程左衛門の
小児の守ゝ。ゝ十六歳の處女をゝ。
ゝく。ゝゝ情式ゝ。ゝ守ゝ

袴の如き物もゆるし。丹波と市ノ丸くなりて。藤原の意の
ごとくふかくなる。二十年の男ぶり。情くるぞとい思へども。
めいさくなる物なく。支障なくなるべし。今を
いとある幸者もいとと。あと一年二年い合ばよくなし
てあるべとて。こまにかくれるをとて。撫ひよなて撫うと
思ひ。国も出もうはくしに。縁ノ国所もうとひて。気長く
慎切に法くしいるべ。今い深くも思ひあ人。あるといいどこ
さるよ。意も人間の冥利ぞて。今日ものび来る所くそくい

種子山町の叔父の家かるて。叔父ゆもあるけ。
ゆして。逢しるるまべ。意もあるで門口へ。叔父
さんまるごこさえい来まもんく。俊へそ。おまるけ。サア
いるやナ。俊ぞ。意男のちとごとこて。市へ逢へも待ちく
和うく笑くもあんまりごい。アハハハト気種のあるべ完
ホ顔あるめ。ごへアレサ。俊叔さんをうぞい。
ちやく来ているく。親孫まるるが。ゆるうる。その法のうぐ
居と所をツイ。おそくちんこさうこさんが。来て去まるこ

らうとろうけそう。どへいまで先刻来るまちがく
ちがくくるるこそ居るまろこぐ。まりへが来ねへめどうら
糸関ぶたしそうら濃よ来ませう。おりくとおまづが来るで
あろ。まこてこ来るくくまろとのうて。今まぐと知れ行くまちて
お飯のおかづもたいらくくあるぢく来へ待くもこ
ぐ来るさるの武待くく居や。おらア今出入場うう
ぼよ来とめ。ちろと待て来るわどよ。来るこそへまと
そちくるおまづ武来く行

第四回

神子山町寺あるみち伯父へ。大工平吉とうへ居る。迎年
揚武出るよ落ち。今へ隠居の家に住とと。揚代仕事の他
の新ら。古九番匠絵景方まで。同取新者上るの揚屋出
入場まり帰りて来く。初りへ人利のりとへまくの絵景武
ちまいで。彼見ぶへあるもそ来く二階まりて下まる二年
新八年吉清よ向八 ヘヘヤしくウイうとくと寝へまこと。まづへ
ぐ早いろのろまう 年ヘ十二 今しげと始まるみぐろ。まへへよく

寝てしやめん。はなぐ紀しそ。ふたりとなりて。そ。ふたりと
まつさ。どのぞむの様子多別るゝ。婚姻豊太が つ[illegible]
ぶ。あるとけ 気長よ面倒をつんで 寄こく ふぐさいまつ 私が
第ろう 一人の姪。田舎の 実ろ 親ろ 二人 ともう 三年 第ろ 古
人とわろて。今ぞ 私の 姪も 同ぬ。ろ カよ まるめ 見がとと
あるまつも 山ろう 田舎人 どぐろく。来年 あ見 妻房 うて。ろ世
ぞも 姪ろ とろ 第ろ の 中 姪。こ 番 豊 が 姪 老ろう
ぬちろ ぞ 世 姪 も あさら ぐ。第 清 日 しぐ 助 ぞ。こ へ

へ て ど ぞ 第 豊 太 ぬ 姪 ひ ま ん キ へ こ 姪 ど ろ 姪 ま
ろ け 第 人 時 ろ ゝ 清 金 と 第 ろ 姪 の 絵 島 が 山 姪 ろ め り や ぞ
こ へ ま
キ へ 高 姪 サ 武 第 ろ の ま へ 町 の と 遠 ぬ く。ま ろ く と 清 ま が
ぬ ま
て ま ま 取 こ 子 平 こ へ コ リ ヤ 見 こ ま の ま ま 一 枚 の 絵 島 姪
し ま 姪 ま 出 ま ま ま 見 高 師 師 速 の キ へ 今 の 姪
ま ま
べ 島 今 ま 山 通 り の 建 方 ぞ キ へ 金 関 姪 ま ま 第 ま 師 殿

はゝ勿論 其表屋造作までも大器ハそまるたゞハね夢幻の
作事ハ元来 私が 相生カ子サ へさくに天ちうさづる賜のめ
年へ工 ゆがエ へアくくく

和〻せまいと。嚴しく 仕業ゲーてわるゐを 三へ五リ イヤ 志
かーこま形るゐとも ござへませまい。なの業屋るゐおーへ
そん 手形るゐもの人ゆ めんまゆ ちまうーさらうゲ。家屋 徴見二ケ
舞 ちーゐだ。今よ まごーし式ちる人のちいのどこそへ命を持て
ちゐ ちゐ 右業とーしゆ 和へ 出業 まちいるとおゆ人まん。ま
ーく 商人 和ちごぢ。まうかゐ 今ゆ 命ぢくと 笑いちへ
恵 ゆ形 けーて気づちへ ございません。そーく いお名
業の 新式 切屋 ちゐ。伽知の 絵島ごう 和まへいちまん

まい 平へ さう さ弦。高壁師 虎といの 平絵 切ま とうやア
ゐけい 弦人。和の 絵業 より 金を 入まて。まうと まゆ人ふゆ ゐうり
やちく。庭の 泉ゐう 稲業ゆの 宮まて 漏さて ちゐーと
日 和ゲ 自慢 反古ホ ちるのゆ 殘ちる。愛の 強張ゐ!
て ゆ。国の ちぐ さみホ ちうてゐ ゐまへる を
ぜませう ゐう。ゐまを ぢる 高壁といの 新を 切ちく
三へ ハテ お遠ちく 切ちまま まへ まゆ ゐるく お ちゲの
編や。たのを の ちゐーを おまちゐ人 おへる 奪引出 三へ五イ

手へハテサ そうぶつくをまるものへあい。塩谷のろうもくの浪人
流へでも。愛くるく 今ふあるまそうる 三へハテ 愛くこ 個見さる
の 手へアハ〳〵 商人を 聟うう。職人乳がちなくまつて。百
でも 残よまるくろ。ツイ 事成よまるの。何も乳よまる
ようけいるい。他のこれ まよ おそごぞれ 三へ豆 みづとうト
おしいでく。まの奥 おりと 手へまへうち 旅 手へヤしく ハヤ
おくろいのよ ひきぞくる。ちっー おそづへ 愛ふも ちくぞ
三へ 何紙 おそづグ 愛ふも 三へ ちくぞと 手へハテ ろ 今日へ 呼

らい ちあいま 三へ 左様 ちくべまくと 遣日ト いとる おひ
しそ 三為る 仏の中よ 三十年が。まへ 呼び まへうとびひ
そまとりいよく お ちづよ 親しく 繋ぐましが。実よ 渡
せ〜 絵屏風。高壁の 愛ふ 清よ お遣 あれちと ろうア
しうべ。ちくぞ ちの屏を 山 枠 大星の 絵へつくし
けれが。ほ 裏 ちの 大よろ とび。こまより 東へ 下ろ紙 ちの
ぞ。夜 対のよれの 手配 まへ。山屏紙 ちくあせ しとぞ
ちいく 大星の用 仏 深く。山外 義士の そまくより。ち 渡

明約
又こい不半
色慾乃
墜穴ま

をのとあくあくりこる。給高よ合して参考る。たしこ小
まちがひ
ろ遠めらざる。西氏乃こをさめて後用ひしこり。彩て大合ハ
わざと
東ゑ下ま。徒方の多和合を下知しけるゴ。或と元岡野
ちう
三十郎ま おもひ 大へイヤ十三 岡野氏 ま孫ハ妻女の妾塙方
便ハいらぐ いこまま ま一こる 三へイイエ 拙考ハ此ねのとこあと
いまぐ妻とヤもものハ持ませねが 行ぬへ 大へ 長ハ
あこうり こま孫 あのまび 師匠の暴内 こらく 若これしハ
維多 てつぐこ 多ま いまこれしぞ。強ハ同居ハいこまん

終ハ 変婦と 約束 ひし 妻ハ 男の こあ。 御元 罪
こハ いこまま 移ど。 如知 おもひ 強。 わらべき 新妻を 人が
切腹 こあこそう 紛乱 こと。 二ッま 一ッ 今の 宝あ。 そまとも 知
で ここ 知ま いこ べ さぞう 岡章 ゑこん。 人の 縁ど 金
げく で。 ちまとべき ゑで ハ あけま ども。 せめて 女ゑの 身の
おこ 義ロ 名ト 二十ま の 金を 減し けれバ。 岡野も 大ま 強ひこ
こと を あこ ぐま 生ハ こく。 来ま 主和 こう 知こ ま も
入用の こと わ こん ま ハ。 不義 徒ひ 捨て も こ こ べと

わさ
芸えけるゞ。彼対の　いにしへよりとまとあく。高壁の屋敷の
いとまなくさせ。伯父　平清盛の　絵へ頼けおれるゞ間も
あく彼対の　絵判るく。高壁の門前ある二春屋敷
清盛といふも。塩谷　浪人の義士すして。子代も殘らぞ
一味の　お陸。かるまくれ　ありけること。岡部のるとりき
醤油　なれど　なく　おまづゞ　伯父　平清盛　はるてとう
さとりて　居くも　そまぞとへ。わうさぞ　猛の　ゞのうち　不
便　いやさんとりさくなく。　ゞとも　なくあまづゞ。　駒

くくくも　無しさへ。世間の人の　貴ものふ。こまる男と
海　中。　花　行　あとゞ　ゞまでも。　ゞよ　あられぬのゞ
あくで。十ヲ　九ッ　切腹　ゞ　貴屋　ゞくとも　海陽　ゞ
根の　ゞ　守と。ちりも　ちくゞ　最ゞの　仕合せ　ちくゞと
きくはくさ。海　かくしくくゞ　あくく。長屋の　ゞ　辻石も
ゞ　義士　ゞのちりゞ。　ゞ　ゞ　ゞ　ゞ　ゞ　ゞ　ゞ
ゞゞゞ

知らぬ。筆ーー此月今日。形ばかりこそ。まさりけ
伯父。手紙を。ハ。ハ。ぢ。ハ。ぢ。ハ。ぢ

罪とゞ成。孝忠しゝくトおせどいとも。涙のたゝそしゝ

まけゝ

正史実録傳 いろは文庫巻之三

江戸 狂訓亭主人著編

第五回

そも大星の君子の智ゆく泉人を精育るゝを人ゝの

乱風ふよりゝことを教訓中ふーゆ大鷲文吾と出来

しゝ忠直いゝゝ方るけまゝど生まゝ法いゝの麁忽りの心

乱せゝらゝさ生まゝるゝりゝが中風を助ハ文吾ゝ中ゝ

をおゝゝるゝことをまるべべとゝりけれバ文吾ゝ天性

小等し。人ありけるべし。笑いうる業を学びるべ
ものを。ちづかるることあらんと。ちづ拙き業を意じく。仏法を
学ばまよとぞ。をしえける。さるべき定業のその日より師を
ありしあてあらんとるべけれども。さるべき私のたびの
あらく。他ある間でおのが定まる。はくぐく業ど居ありしが形
学ばる。よ学の。和学をあらしくさるづりけるべこそ風
流とやらんの登りるべしと貢ぬ傾けやうくその心
をぞ。はくぐく拙けける

かく。あらるめ。ひそうる大学せけるべ中。学ねいとれ
をうんく大よろこび文字の教え撰りるどをしめそ学び
記せしのがこの風流を業しるそ。物を雅を。あ
らん。惜いうる。多示業のつぎいうれのこ今すこし
加減用ひんとあり。あ大鷲文書うましげよあろ
こび。ゆうる紙笑。作へそ。きさけるを。しらぬりのもるくいと
あろうるる人ありとそ。学ひのうるとありけるがきさ二十四

稽古おこたり後

初春さく耳ある武士うた

きさ十日五日過しく後

武士の芳きさく立ふけり

ことぶ上いうて貞徳この俳逸を学ぶうしろべ大星の

多紙おくよろこび呼嘯ぎべしこの名吟実は武の

友道をかなるめのこの人あうんと賞うけるが

おしく後この俳諧者流の達人とうこの宝

井貫子あんどく扇紙あくべ湖月堂子菓と雅名し

塩谷家新絶の後の毒ふ風流を祝ば一代の雅吟も

きくるかくぞこふその一二弦あげて雅ある文を四人女

示をこの水間沾徳といふ俳諧の宗匠人俳対の義

選ぶ子餞うう

[illegible]

[illegible]

の[illegible]那[illegible]今[illegible]
[illegible]石[illegible]清[illegible]波[illegible]以て[illegible]生く世[illegible]
[illegible]

山[illegible]碧[illegible]ちくるも[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

十二月十日

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

余所よ
詳しく
敵地の
案内を
導く

一書事ありてそかくしてつゝまんとせば懐合家の十分一なりとも名
流うちこゝろ他を知ることもなく行幸の事を再興の事
限代あらんと擬古の面々名聞をたのまざるこゝろ他
をも敬ふね擬授武士と世上の人とそしらるゝ古君
の位合身を代まつらく忠を尽さんと猶いとたふ
あらはせし一書なり推案あるべし

[illegible]

者も稚ひの中元ようあはさしい
ちうまんの位置地所一番目成
たゝぐしかゝぐゆべいよく切腹云ふ鬼
[illegible]の位おのゝ度ありいづれも近日
[illegible]

序　月

[illegible]

御厚堂

子引町の二番目と云ふ所に塩谷判官の供養なり。
大豆まぎの年のそこの年君の塩谷家は御繁昌
ばと祈るせうどそのるゆ多くかるハ孫ハ長生
所望を所存とあさんと後生をうしろ載のごとく
親めー密事に切腹と云ふ所が後世菩提に切腹云
とあるーも大鑑文密の酒盛が末代までも残りその
風流を賞ハ祝せうゆまことを大義の功をいとく
ありがたるゆふるんさまでど分を盛ー婆ど職ふうしろく
歌の稽古を個が実ま貧困のさま ちりしハ法師ま蒲
団紙俳諧くちけ 俳諧のそもくまきのことまと俳諧の
歌三日十三日の朝のるりー文密ハ所用ありく高へ
のたけるが途中まて煙掛ハの竹式賣男ま程ゆひて
ま〳〵く竹ゆく〳〵竹式ゆげゆちる一年上受ぐず
受ふまけやせう「ふく〳〵いくもいが五銭
賣て下ま〳〵そーく おまぶ賣る ま毛関係ま
ゆーひてくの「工 竹工そんまるおあくさんハまと 山州ま

夢てまうけやうとゝのゝる　手拭をくびに元宮へ行く
男出ーるさまざまいく　私が出しを日数を
ありやア　おめくさんまうける　拵へありやどんそしく
私がおまへよ　能てあるく　くまくるべおめへふうう
新へで　日ごが　門並　夢てめるくあるうまうもん
だうくしい　文へ　あるわどそまへそうざぶ　竹の代へうア
いくうざ　竹へ　丞張でく　文へ　そうョ　とまでこ二百銭ざア
元日の門うう　二百文よ　有てあるのざう　はそうう紙へ

十本　あり　夢さのう　今新のうのまうけざア　文へ　拵
るうこ　こまこ紙　巻ものもうその竹紙　おまよ　巻るうおもそこ
こまこト　懐中　ありこて　金百匹　皇紙　ようこさ　ーのこまへ
竹　夢へ　新ようこさこまく　竹へ　ようあう　張と　拵まこのうへ
いうく　こまこざへ　丞張ものうが　こまこ紙　丞張　まこうう
ざのざ　四　丞新　夢るあうざ　同通　こて　ーこまト　いこまて　竹紙へ
あこまこまて　竹へ　こまこざへ　丞張　竹紙　夢てまうける　新へ
うく　竹うう　拵まの　あうるまと　いうるうるのざ　ざこまう　マア　をの

形ばかりのやせん姿を中に串刺るゝ竹槍らしく家
を造くワセドレ〳〵ヨーゴト大鷲文蔵竹槍の示し
らして竹マツ竹を扇人の中に〳〵ア〳〵ど
うも新撰者人の中ごーいんべ文蔵もうち美人竹やく
もはの門竹やも金の義理中まべ出ごゝく附そひをし
えつく中ゝくこゝまて出るけるかゝて文蔵の師匠の屋
敷の義紙書あるく打も家中の家のうちより呼
はまられて文蔵いよゝ〳〵あるく小
さう絵もあるゝ大安寿〳〵殿中ゝゝまゝ高あゝべ
こべのうちも統の中や橋本中ゝ竹の中る橋く
門ゝ家中ゝ門屋買べ大鷲文蔵矢の助と
やゝゝあゝこべ長屋の業内ゝゝ成ゝどかる際
物寿あ中むのゝあゝさべ男ゝのゝゝ小屋
ゝ中ゝ屋敷を中ゝけるが婦女川の方へ親く呼小
向ふゝゝて大鷲ゝ姿をゝゝけゝく長ゝる人を則宜
丼甚角ヘイヤア仕ゝとゝゝゝ源氏蔵ゝ師匠の文

家よりたぐひなき姿アリ　そもそもでも　俳諧の種紙と文へ
イヤハヤ　面目なきの仕業　風雅も　なほ　今日の辛苦　甚へ
何ぞ　宝あり　浮世の盛衰　ちらさ　まのぐるよ　一盃やらう
いろ　ちよろこどもとうち　連て　碁角が　形と　火鉢とそぐ
俗雅俗　宝井よ　まこる　子孫の　文武　道　ちよ　ちう
義の　ひとう　門　ちと　ちこね　宝晋　衛　その　貧困　とわい
まこと　ひるぐらも　世　捨人　よ　ちこき　碁角へ　強かさ
ちく　居酒　屋よぞ　入ちよ　けるー

閑よりいふ　碁角ハ　元　医　祇　業　ちと　名　仕　下　順　哲
ちまびく　蕉門十哲の　第一　生涯の　秀逸　あげく
かどくー　そそ　五元集　焦尾琴　祇　ちと　あまちの　集
ちり　或　清　庵の　ゆ　秘　蔵　よ　及　古の　一　軸　といふ　ものの　河
つく　晋子　碁角が　名　ちと　そそ　ちと　ちと　ちと　ちと　ちと　ちと
ちふ　月　ちと　ちと　画　ちと　ちと　ちと　ちと　ちと　ちと
蕉　ちと　ちと　ちと　ちと　句　祇　ちと　ちと　ちと　ちと　ちと
ちと　ちと　ちと　ちと　ちと　ちと　ちと　ちと　ちと　ちと　ちと

鄭ぜうこべ君へことと業統むこせうこ紙に碁用ゞ
碁上ゆうーとこれこと碁を有せゆふよ碁角へ名ち業
とうく角業すこのゆそどゆの文字よこ業紙ひこと
ゆふ
まかこいくふ
月かげとト出こ人ーゆ出家よゆうけう人こへ
いゆこ及ゆこ大字ゆゆどろ死いくせこへこど出家よ業
ーこ世業人のるゆ碁こ絵方るく粗人こゆこーー
ゆひーこかこゆて碁こ碁の碁ーこ死ゆこ分ゞ門人

貴子こへ実こよ極家の絵こり師匠の句よ業をれ
こる大羅こ絵こる絵こる所碁ゆくこぞや とゆり
けこへ碁こ碁ここ紙こて貴子を紙よ業こく中
ゆうゆ子こそひへども極碁のおこぞねこゆのこよひ
といひくまこ業紙こりく
月こげを○の初み文字へ貴子碁角ゞ名業こり
上こゆここり業へ碁の紙碁ゆこよこ碁角へ業こ月の
光りのこ作ることへ紙こて同業ゞトへ出せこ業

げゑく[illegible]の[illegible]の[illegible]
豪傑といふべきうちの一雄[illegible]と[illegible]
の[illegible]物として[illegible]
べき歟

第六回

[illegible]
[illegible]と[illegible]
世の盛衰を[illegible]
[illegible]後の[illegible]

[illegible]の[illegible]
と[illegible]
一句[illegible]

[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]

復仇十五日の朔日吉祥丸に乗り義士の後より進み
うけ大鷲の文右衛門走りつき一時日の附句のかをよみく
ばり　甚「くさの甚角へ御殿へ下るべくと涙をながし
しく。　かなたこたその家私とへ今日のうそをありけるを
不風流と知るそうをかまへ　ことの秘ーけ是と後悔
しく　四郎兵衛せをとりしとぞ　出入の夜の寝ふ
蒲団をとりて対面の顔氏もりー男の絵のそのくと
ひどさみーを文右衛門をとがめて子細をとがめをー

えく

絵のその表紙も無とて素の句
と附させーゞさの時の巻軸をて絵金中の評判ゆく
ありける句よりの句よ絵のその容易絵をおもうんと
絵よりいとくよまーあうんいとくめで元禄の古句り
あ氏さの風流よりあらぬ雅よて古歌の人あれども二の
間をたありて陽恩を法くしーて名を表さる者
あり　保栄四年　富士　富永山の出来る十月後河の

室晋こ秋
路よ子葉ゲ
と異る
いぐさるは
れとろく

圓法蓮院の裏門より蒜を乞て孔しうる乞食あり
けうこつ元より矢立あどけなくべ辭世ふ
いつもこのこと解らく硯の墨家
かしこく筆はれ終りけり
法蓮院の和尚ことを弥んごろよ葬り弔ひ今
石碑の殘りて
藏光院存儀居士
と戒名式ことを赤海道金谷の宿沢の佐七という人
の絶えありとぞ他七い幡谷家老顔の町人ありく
かしく坊とりの文禄十四年の頃江戸より帰る俳諧の
師ふく其角ゲ友ありーゲ十四年十二月十六日其角の弟
へ一紙をおくりく彩然かくしー赤海道行くる乞食して終
りぬ法蓮院の裏門に示せーあり其角の弟へ
書い

世の中は
思ざーを圓ふしく孔後

百年みつふ京見同刻歳十人遊
いくの歳人薄命の士唯黄泉の底のそ
知らん

巷の名の野辺にやすらふ

戯号　かく坊

時野十三

と是三十余人のたの一人時野十郎清が舎弟かく小法師

義朝奥州をさして連判を授く新田かく一男又一四も大
里が跡を尋ねおりくそなるべし二度の対面を心がけ二
十餘人の引のそなりける去ども岩城藏義を在ゼ二
君よ仕えね右臣をひそかに知て清盛院の家丈が
藏光院春義居士とつけ一とぞ去る門弟
平宗則といへる塩谷家没落の後老里英作せ乃
厳中余弟門佐工門家と同居してありけるが伯母なる者
和平氏いとゝ不後を今と人ありつゝふ和平い仕宦の手

後のりとく毎日くせめるき日大雪の際まのいとけん
いでゆうんと甘ゑ伯母へ引止め伯母 紀年いろ孝行をいそ
ぐといのことく今月へゆるぶとよさそうるひ大雪よ一日
ぐ〜ひ日を延〜ことそ大年もわるまい あへイエ〜そうでござ
つません先うこも新田へよ見るを夢〜くらまるんのあ
十二月ぐ〜ひをいとひまをうは悲しも家ろく分のかと分
を 伯母 案ずる伯母の心もちぶが不安でお出をいそ
ぐかつ ぐんくよ除つもこ案ろよわるいく煩らつろ

ぶの鞭で走ゆる 伯父さんグ出るよ 仕ろよとは自
まくも 紀年の 個 風情と 不安よ見ゆ 過年も
甘ぐ義理も 年月 産 ぐ 孤 わるくも 不安 思
るト 孤 伯母の一 ぐ 年 ろ その 外へ出 の 町
人 堀屋 義 清 こ人 の 入 り 指 ぐ 中 ろいう
紀年が 浪人の心づ ぐ 孤 案 一 金 巨 を 紀年 ろ 合 力
いく 酒 ぐ も 春 ぐ 今月 他人 ゆく こ 成 体 ぐ 久 といき
ぐく 別 ぐ 一 ぶ 老 十二月十二日のるまで 紀年 の 伯母 を

すゝーまらく義経が供えー食まで聖み頭巾紙綱へかさ
おけく出めたーゲそれより十八日まで寄宿をく十八日
の朝塩谷浪人仇討の号専らをく毛里家の門前
を引めげくゆく義士の行列
徐巡持つる者二人先立て其次に
そなたより御物持ち下人その次徐二人肩を合せて
貢巡組び身その次に大星由良之助その後に
はしくの御物そ二十挺人その中に和平八郎
頭巾巡縫ようけ白綾さんで拵巻一多ひ
さ及もいさまく徐巡故まそ
毛里家の人く主知らく主を見物みーけまで和平八
合て教して引めく巡を送る婦女八涙のよろこび
陽原義経清も乗り金多川の門ろう義経清
和平八連中今日
門暴引てぞろいさまく鎧よ入れ
き義経どのゝ貴そ

右義の爲にけるげ手る紙書きこゝめとい人中濃の伯母
ゝよろこび 表イヤモウ 極らしい 敷付ぞく書るゝど 頼母
表いおそ〻〻〻死見物がぞろく 身て 往きんが 義人 稽古
人ゝ表せまゝ 別段ぜ ございまゝる 伯母イヤ 初ゝよ 和平
ゞ 殘しゝ 殘と手 紙ゞ わるゝと 私いぞて 表書 清て 渡
せばいぶつしゝ ゝゞゝひ死 ゝ死
中濃の 名 同 酒と 親子の 代 料る中 清い
殘り 中清死 てく 死下イ

新刻くそまといそれぬ親子酒
書き 惠 乃 悪こゝろえん
と 落 貴 紙 ゝゝ 書 せ しゝ と ぞ

正史實傳 いろは文庫 巻之三 終

江戸著　狂訓亭爲永

全畫工　溪齋英泉

美艶仙女香
黒油美玄香　一包四十八銅

近年まれに評判よく流行しうの
出来上り製方利も多く入手の
向中は南伝馬町二丁目　坂本氏製

天保七年丙申正月黄道吉日

東都　地本問屋　上田屋久次郎
書物問屋　山本平吉
中村屋幸藏版